

支え合う社会をつくる税金

うるま市立高江洲中学校3年 仲村 心恋

私の父には、障がいのある兄と弟がいます。父は「きょうだい児」として育ち、幼い頃からたくさんの悩みを抱えていました。家庭でも両親からの愛情をあまり感じられず、寂しい思いをしてきたと聞きました。

そんな父にとって、心から信頼できる存在が、母方の祖父でした。祖父は礼儀やマナーを教え、一緒に遊び、アイスを買ってくれるなど、父の心の支えになってくれたそうです。父は今、家庭を持ち、私たち家族を大切に生きています。けれど最近、祖父母から「障がいのある兄弟の面倒を見てほしい」と強く言われ、心が苦しんでいます。一緒に暮らすには現実的に難しく、父は行政の支援を受けながら、兄弟のために福祉施設への入所を考えるようになりました。もちろん、見捨てる気持ちはありません。面会や関わりは続けながら、お互いに安心して暮らせる形を選びたいと思っていますのです。

実は、その祖父母は昔、障がい者のための作業所を、地域で先頭に立ってつくりあげた人たちです。今では、その作業所も成長し、プロのスタッフによる支援が行われ、父の弟も通っています。祖父母が歩んできた道には、障がいのある子どもたちへの深い愛情と、社会への強い思いがあります。だからこそ祖父母にとって、「兄弟を施設に預けたい」という父の提案は、自分たちの努力が否定されたように感じてしまうのかもしれませんが。時には「冷たい」「そんな事はさせない」と心ない言葉を父にぶつけてしまうこともあります。私はその言葉にショックを受けましたが、今は、祖父母もまた「支えてきた誇り」や「愛情を注いできた年月」に強くこだわるのも無理はないと感じています。ですが、福祉も時代と共に変わっています。誰か一人がすべてを抱え込むのではなく、社会全体で支える仕組みが必要です。そしてその支えの柱こそ、「税金」です。障がいのある人が施設や作業所で安心して過ごせるように、またその家族が安心して過ごせるように、またその家族が相談したり休んだりできるように、福祉サービスや支援制度は整えられています。その運営に使われているのが、私たちの税金です。税金というと、なんとなく「とられるもの」「自分に関係ないもの」と思われがちですが、実は困っている誰かをそっと支える「見えない力」だと思います。父が安心して相談できる場所があること、兄弟が安心して通える施設があること、それはすべて税金の力であってこそ実現できることです。

私はこれからも、税金が人の人生を支えるものであることを忘れずにいたいと思います。そして、家族のかたちも支援のかたちも一つではないことを、多くの人に知ってもらいたいです。税金は、誰もが「自分らしく生きられる」社会をつくるための、大切な仕組みなのだと思います。